

【D年】聖霊降臨節第19主日(2024年9月22日)

## 【旧約聖書日課】箴言 3章13～20節

- 13 いかにかに幸いなことか  
知恵に到達した人、英知を獲得した人は。
- 14 知恵によって得るものは  
銀によって得るものにまさり  
彼女によって収穫するものは金にまさる。
- 15 真珠よりも貴く  
どのような財宝も比べることはできない。
- 16 右の手には長寿を  
左の手には富と名誉を持っている。
- 17 彼女の道は喜ばしく  
平和のうちにたどって行くことができる。
- 18 彼女をとらえる人には、命の木となり  
保つ人は幸いを得る。
- 19 主の知恵によって地の基は据えられ  
主の英知によって天は設けられた。
- 20 主の知識によって深淵は分かたれ  
雲は滴って露を置く。

## 【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙 11章33～36節

- 33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。
- 34 「いったいだれが  
主の心を知っていたであろうか。  
だれが主の相談相手であっただろうか。
- 35 だれがまず主に与えて、  
その報いを受けるであろうか。」
- 36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

## 【福音書日課】

ヨハネによる福音書 10章31～42節

- 31 ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。32すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」33ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」34そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。35神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廢れることはありえない。36それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。37もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。38しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」39そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。
- 40 イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行って、そこに滞在された。41多くの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」42そこでは、多くの人がイエスを信じた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 箴言 3章13～20節

- 13 幸いな者とは知恵を見いだした人  
英知にあずかった人。
- 14 そのもうけは銀による利得にまさり  
その収穫は金にまさる。
- 15 知恵は真珠よりも貴く  
どのような財宝もこれに並びえない。
- 16 知恵の右の手には長寿  
左の手には富と誉れがある。
- 17 知恵の道は友愛の道  
その旅路はいずれも平安。
- 18 知恵は、それをつかむ人にとって命の木。  
知恵を保つ人は幸いである。
- 19 主は知恵によって地の基は据え  
英知によって天を定められた。
- 20 主の知識によって深淵は分かたれ  
雲は露を滴らせる。

## ローマの信徒への手紙 11章33～36節

- 33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。神の裁きのいかに究め難く、その道のいかにたどり難いことか。
- 34 「誰が主の思いを知っていたであろうか。  
誰が主の助言者となっただろうか。
- 35 誰がまず主に与えて、  
その報いを受けるであろうか。」
- 36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

## ヨハネによる福音書 10章31～42節

31 ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。32 イエスは言われた。「私は、父から出た多くの善い業をあなたがたに示してきた。そのどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」33 ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒涇したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」34 イエスは言われた。「あなたがたの律法に、『私は言った。あなたがたは神々である』と書いてあるではないか。35 神の言葉を託された人たちが、『神々』と言われ、そして、聖書が廢れることがないならば、36 父が聖なる者とし、世にお遣わしになった私が、『私は神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒涇している』と言うのか。37 もし、私が父の業を行っていないのであれば、私を信じなくてもよい。38 しかし、行っているのであれば、私を信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父が私の内におられ、私が父の内にいることを、あなたがたは知り、また悟るだろう。」39 そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

40 イエスは、再びヨルダンの向こう岸、ヨハネが初めに洗礼を授けていた所に行って、そこに滞在された。41 多くの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」42 そこでは、多くの人がイエスを信じた。

## 黙想のためのノート

## 次主日の教会暦と聖書日課

・9月22日「聖霊降臨節第19主日」の日課主題は「神の富と知恵」。

・旧約聖書日課は、「箴言」から、知恵の勧めが告げられる箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、異邦人とユダヤ人の双方の救いについて論じた後、神への賛美頌栄をもって議論を閉じる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、石で打とうとする者たちとの対話を終えて去って行かれる主イエスを描き伝える箇所。

## 旧約日課(箴言3章より)

・「箴言」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「諸書」に収められた格言集。「箴言(ミシュレ)」の書名は冒頭標題に基づく。ユダヤ教では、同様に詩文書である「ヨブ記(イオブ)」および「詩編(テヘリム)」と共に「エメット」の呼称でまとめて扱われている。ヘブライ語「ミシュレクマーシャル」の原義は「類似すること／比例すること」で、聖書正典中では「格言(箴言)／ことわざ／たとえ／託宣／歌」などの意味で用いられている。ユダヤ教のラビ伝承に拠れば、「箴言」は、「雅歌」や「コヘレトの言葉」と共にその比喩的表現のゆえに、また主張の相互矛盾のゆえに、正典性を巡る議論の中で繰り返し疑義が呈されてきたが、最終的には、口伝律法を広く認めるファリサイ派系ラビたちの主張によって正典にとどめられてきた。つまり、ファリサイ派系ラビたちを中心として2世紀以降に生き残った「ラビ的ユダヤ教」において、本書「箴言」は好意的に扱われてきたと言える。

・13節/19節「知恵(ホフマー)」は、本書を特徴づける用語の一つで、1:7「主を畏れることは知恵の初め」(9:10も同様)は本書の性格を総括的に示しているとされる。この語「ホフマー」は、「出エジプト記」から「ダニエル書」までの各書で広く用例が知られるが、殊に「ヨブ記」「箴言」「コヘレトの言葉」に集中的に用例が見られ、これらの文書は古代オリエント世界に広く知られる「知恵文学」の系譜の属するものとみなされている。他方で、「知恵」は、ユダヤ正典中で「列王記上」2~11章で描かれる「ソロモン王」に帰される属性として位置づけられ系譜があり、本書「箴言」や「コヘレトの言葉」(また「雅歌」)もその標題からソロモンに帰されるものとして扱われてきた。

・13節/19節「英知(ターボーン)」は、「知恵」と並んで本書で特徴的に用いられる用語で、「理解／認知／気づき」等の意で用いられている。20節「知識(ダーアート)」は、正典中の用例が5例しかない。

・日課箇所は、本書で繰り返されるように、「知恵」を擬人化して描き、それによって得られるものの価値が説かれている。この「知恵」および「英知」「知識」は、ここで「主」に属するものとして描かれることによって、創造信仰・摂理信仰の基礎づけとされている。

## 使徒書日課(ローマ11章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体を訪問する計画を伝え、また、その後のエスパニア伝道計画への協力を求めるために著した。

・パウロは、シリア・アンティオキア教会から派遣されたバルナバ宣教団に加わることで宣教活動を開始したが、その後、宣教方針の対立からバルナバ宣教団を離れて独自の宣教団を組織しマケドニア宣教(フィリピ、テサロニケなど)を展開、しかし多くの成果を上げられないままアテネを経てコリントに寄留、同地でローマ教会に属するアキラ・プリスキラ夫妻などとの協力によって教会共同体形成に一定の成果を見るに至った。おそらくこのコリントでの宣教活動を契機に、パウロは、バルナバら主流使徒の宣教方針と調停的な立場を取るようになり、より包摂的な福音理解を構築するようになった。そのような立場・理解に基づいて、パウロは、アンティオキアおよびエルサレムの教会指導者の承認を得て、エフェソを拠点として活動を展開する時期を迎えたと考えられる(使徒19章参照)。ところが、おそらくこのエフェソで教会内の新たな対立に巻き込まれ、当地を拠点として活動することが困難になり、エルサレムの教会指導者の承認を得てローマに拠点を移すことを模索したと推認される。この過程で記されたのが、本書簡と考えられる。

・本書簡で展開されるのは、他の書簡での議論を経た上でパウロが最終的に辿り着いた、旧約聖書に基づいて可能な限り包摂的な福音理解の主張である。パウロは、初期から、「割礼」や「食物規定」などの外形を規定することによって「ユダヤ人らしい生活」を枠づけるものとしての「律法」を、「救い」とは無関係のものとし、「律法」規定に枠づけられる「ユダヤ人共同体」ではなく、「洗礼」によって基礎づけられる「キリストに結ばれた者の共同体＝教会」が「救いの共同体」として示されたことを「福音」として理解していた。しかし、その「福音」を徹底するためには、「割礼」に象徴される「ユダヤ人共同体」を枠づけるものとしての「律法」規定へのこだわりを徹底的に排除することが不可欠と考え、なお「割礼」など「律法」規定を肯定的に受けとめようとしている者たちを強く批判していた(ガラテヤ書参照)。しかし、本書(ローマ書)に至って、パウロは、そのような排除の論理ではなく、より包摂的な相互受容の論理に基づいて、「愛」に根差した「救いの共同体」としての教会を提示することを試みている。

・日課箇所は、9章から展開されている、「イスラエルの問題」を扱うまとまりの結尾。ユダヤ人＝イスラエルと異邦人について、神が歴史的に異なる扱いをされてきたことを踏まえながら、長期の視点において神は、両者を同じような過程(神からの離反と憐れみによる回復)で「救い」に至らせようとしている、と説いている。この救済理解を基礎づけるものとして、神の超越的な摂理を賛美する句が、ここに置かれている。

## 福音書日課(ヨハネ 10 章より)

・日課箇所は、前週福音書日課に続く箇所、「神殿奉獻記念祭」＝「宮清めの祭り(ハヌカー)」の場面として設定される枠組みの中に置かれている。前段で、ユダヤ人たちが「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」(24 節)と問うたことに対して、主イエスがこれまで同様に「わたしと父とは一つ」(30 節)という主張をされたため、日課箇所では彼らユダヤ人たちが怒り、石で打ち殺そうとした、と展開している。

・「神殿奉獻記念祭」については、前回資料「聖書と祈りの会 240911」参照。この祭を背景として、「メシア(キリスト)」とは、ユダ・マカバイのような軍事的ユダヤ民族指導者を指して言われており、前段 24 節のユダヤ人たちは、その意味で主イエスが「メシアなのか」と問うており、またそれを期待している。これに対して、日課箇所ユダヤ人たちが怒っているのは、主イエスが「人間なのに、自分を神としているから」(33 節)であり、期待していたように「メシア」であることを主張しないからである。ここには、「ヨハネ福音書」の「キリスト」観が強く反映していると考えられる。初期教会では、早い段階で主イエスの称号として「キリスト」が、特にギリシア語話者の信者の間で広く用いられるようになっていたと考えられる(パウロ書簡など参照)。しかし、その定義は必ずしも明確にされていなかったため、諸教会間で理解に違いがあったと推認される。「パウロ書簡集」などでは「キリスト」は主イエスに充てられた単なる固有の称号として用いられるか、旧約正典に基づいて「神から使命を帯びて遣わされた者」という意味で用いられている。他方で、ユダヤ人を中心として「キリスト(メシア)」が軍事的民族指導者を想定させる現実があり、このことを踏まえて、本福音書は、そのような理解を排除しようと試みていると考えられる。

・40 節以下で、主イエスが赴かれた地が「ヨルダン川の向こう側」と具体的に示され、再び洗礼者ヨハネとの関係に目を向けさせている(1:28 参照)。「ヨルダン川の向こう側」は、主イエスの時代は「ナバテア王国」に属し、106 年にローマ帝国に編入されると「アラビア・ペトラエア属州」と呼ばれる地方となっている。

## 来週の誕生日 (9 月 22 日～28 日)

## 主日礼拝の讚美歌から

・21-4「世にあるかぎりの」(= I 62)は、C.ウェスレー(18 世紀英国)の代表的な讚美歌で、彼が自身の回心経験を記念して作詞した。曲は、19 世紀初めにドイツで活躍した音楽家 C.G.グレーザーの曲を 19 世紀米国の教会音楽家 L.メーソンが編曲したものの。1954 年版の曲は日本版独自のもの。  
・21-451「くすしきみ恵み」(= II 167「われをもすくいし」)は、ゴスペルソング「アメージング・グレース」で知られる。作詞は、奴隷船船員として働いていた際

に遭遇した暴風雨の中で回心し英国教会の司祭となったジョン・ニュートン。ウェスレー兄弟に続く世代。曲は、19 世紀初頭から米国南部で歌われていた民謡が原曲。

・21-514「美しい天と地の造り主」(= I 449)は、20 世紀カナダで YWCA 活動に従事したメアリー・エドガーがキャンプソングとして作詞した歌詞。曲は、19 世紀英国教会司祭ブリンジャーが趣味で作曲して残した曲の一つ。

## 21-4「世にあるかぎりの」

## O for a thousand tongues to sing

1. Oh, for a thousand tongues to sing / My great Redeemer's praise, / The glories of my God and King, / The triumphs of his grace!
2. My gracious Master and my God, / Assist me to proclaim, / To spread through all the earth abroad, / The honors of your name.
3. The name of Jesus calms our fears / And bids our sorrows cease. / 'Tis music in the sinners ears; / 'Tis life and health and peace.
4. He breaks the pow'r of canceled sin; / He sets the pris'ner free. / His blood can make the foulest clean; / His blood avails for me.
5. See all your sins on Jesus laid; / The Lamb of God was slain. / His life was once an offering made / That you might live again.
6. Glory to God and praise and love / Be ever, ever giv'n / By saints below and saints above, / The Church in earth and heav'n.

## 21-451「くすしきみ恵み」= II-167

## Amazing Grace! How Sweet the Sound

1. Amazing grace--how sweet the sound-- / That saved a wretch like me! / I once was lost but now am found, / Was blind, but now I see!
2. The Lord has promised good to me, / His Word my hope secures; / He will my shield and portion be / As long as life endures.
3. Through many dangers, toils and snares, / I have already come; / His grace has brought me safe thus far, / His grace will lead me home.
4. Yes, when this flesh and heart shall fail / And mortal life shall cease, / Amazing grace shall then prevail / In heaven's joy and peace.
5. When we've been there ten thousand years, / Bright shining as the sun, / We've no less days to sing God's praise / Than when we'd first begun.

## 21-514「美しい天と地の造り主」

## God, who touchest earth with beauty

1. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / With thy Spirit recreate me / Pure and strong and true.
2. Like thy springs and running waters, / Make me crystal pure; / Like thy rocks of towering grandeur, / Make me strong and sure.
3. Like thy dancing waves in sunlight, / Make me glad and free; / Like the straightness of the pine trees / Let me upright be.
4. Like the arching of the heavens, / Lift my thoughts above; / Turn my dreams to noble action, / Ministries of love.
5. Like the birds that soar while singing, / Give my heart a song; / May the music of thanksgiving / Echo clear and strong.
6. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / Keep me ever by thy Spirit / Pure and strong and true.